地誌研年報 9 号，2000年 3 月
ANREG 9, March 2000

地域研究を地誌に改造する方法：ネパールを例に

岩 田 修 二*

How to Write Interesting Books on Regional Geography: The Example of Nepal

Shuji IWATA*

目　　次

I．はじめに
II．おもしろい地誌とは
III．ネパール全国地誌
IV．ジュンベシ谷の地誌
V．実現のために必要なこと
VI．まとめ

I．はじめに

筆者は地誌学概説の授業を毎年担当している。そこでは，地誌と地誌学の発達史・学説史をのべ，いくつかの代表的な地誌を紹介し，地誌学の方法論を解説している。最後には，必然的に，勢いのない地誌と地誌学の現状を述べざるを得ない。その現状を知った学生からは，きまって，落胆したという感想を聞かされる。地理が好きな学生のかなりの部分は地誌に強い関心をもっており，地誌こそが地理学であると信じている。また，最近のマスコミや出版界では，海外取材企画や旅行ガイドをはじめとする地域情報関連の報道・出版が大盛況である。社会一般も地理的情報に飢えているようにみえる。

ところで，地誌学が現在のような低迷した状態に陥った原因は，Schaefer（1953）の地理学例外主義批判によると一般には考えられている（たとえば，坂本・浜谷，1985，pp.1〜2)。しかし，地誌の衰退はパラダイムの交代のような理論上の出来事によってではなく，単に，地理学者の大部分や，他分野の研究者たち，あるいは一般の読者たちをおもしろがらせ，有益と感じさせる地誌書が書かれなくなったからではなかろうか。地誌書がおもしろくないことの形容は，たとえば「無味乾燥な記述」「退屈な網羅主義」「いっこうにかわりばえしない体裁，内容」（藤原，1997）などと酷評される。熊谷（1996）は，おもしろくない地誌書の著者たちには (1) 個性的な地域観や地域理解が欠けていること，

*東京都立大学大学院理学研究科：Graduate School of Science, Tokyo Metropolitan University

(2) 一次資料による精緻な記述や克明な長期間の観察が不足していること，(3) 記述内容に対する論理的認識の深化や調査方法についての修練が欠如していること，をあげている。1940年代以後，地誌学は，地誌学よりももっとおもしろいと多くの人が認める area study（本論では以下地域研究と呼ぶ）の諸分野，文化人類学や社会学などに取って代わられてしまった。

しかし，地誌書は地理学の狭い世界の中では細々と生き続けている。「社会的使命を終えたかのような『地誌』があいかわらずなぜ再生され続けるのか？」（熊谷，1996）という疑問に答えるのはむずかしくない。多くの地理学者が地誌の重要性を認識しているからである。しかし，おもしろい地誌書がでない理由は，熊谷（1996）・藤原（1997）も述べているようにつぎの四つにまとめられよう：(1) 特定の地域のスペシャリストとしての地理学者が少ないこと，(2) 特定の地域の研究を通して，地理学者自身の認識論や研究の方法論を吟味し再構成することが少ないこと，(3) 地域研究のいくつかの分野にくらべて野外調査を軽視しており，技術的にも習熟していないこと，(4) 政治的・社会的・心理的文脈を軽視していること，あるいは，そのために地域研究諸分野との議論ができにくいこと。

これらの点はいずれも地理学のアイデンティティとかかわってくる大きな問題であり，一朝一夕には改善策を見いだせない問題かもしれない。そうだとすれば，地誌学の低迷状態は当分の間改善されないと言わざるを得ない。おもしろく，他分野から評価されるような地誌書の出現は，しばらくの間むずかしいだろう。いっぽう，「世界の現状を正しく社会に伝え，人々の世界認識の形成に貢献するような優れた地誌書を書くことは，地理学に課せられたすこぶる重要な仕事」（藤原，1997）であり，これを止めると地理学の存在意義も失われるという危惧ももっともであろう。地誌学は必要であり，地誌書は書かれなければならない。そうだとすれば，おもしろく，他分野から評価されるような地誌書をつくるために何らかの方法をさしあたって考えなければならない。とくに，一般の読者を獲得できるようなおもしろい地誌書が必要である。

この研究ノートでは，まず，おもしろい地誌とは何かを考え，つぎに，手っ取り早く，おもしろい地誌書を制作するためにはどうしたらよいかについて，筆者が少しは知っているフィールドとしてネパールをとりあげ，試論を述べたい。つまり，ここで示すことは，一般読者向けの，ひとつの簡便な地誌のための方法，あるいは即席地誌作成法の序論である。

II．おもしろい地誌とは

1983年から86年にわたって刊行された週刊朝日百科「世界の地理」は多くの読者を獲得

し，地理学関係の刊行物にしては例外的に好評であったといわれている。その理由について編集委員の一人，藤原（1997）は，(1) 臨場感のある写真，(2) フィールド経験のある地域のスペシャリストの著者，(3) 問題を絞り，時間的・空間的背景を含む構造的説明，(4) 住民のありのままの生活のようすをとりあげたこと，をあげている。つまり，現代社会の実像をいきいきと描いた問題志向型の，おもしろい地誌であったからと述べている。これが可能になったのは，最終号の「終了に際して」で発行元の担当者が「新聞は日々の最新のページであり，最新の地理書である」「刊行するに当たって，目標としたのは，地理学者の学問的蓄積とジャーナリストの目の結合でした」と強調しているように，ジャーナリストと地理学者が協力したからにほかならない。出版局側の方針に反発した地理学者も少なくなかったらしいが，結果としては，おもしろく，地誌らしい地誌になった。

文学作品の中に描かれた地理的文脈をとりだして地理学理論で説明した「文学のなかの地理空間－東京とその近傍－」（杉浦，1992）は，具体的な地域の事例を文学作品にもとめて東京を描いた地誌書であるともいえよう。文学に書かれていることは，小説の筋立てに必要な絞られた問題であり，登場人物たちの細かな生活のようすが描かれているわけだから，週刊朝日百科「世界の地理」が成功した理由として藤原が述べた「社会の実像をいきいきと描いた問題志向型のおもしろい地誌」になることは約束されていたと言えよう。杉浦が，地理学者の書く地誌書がおもしろくないことを意識していたかどうかは定かではないが，この本は文学者と地理学者の協力の成果とも言える。

上記の二つの例も示しているように，残念ながら，地理学者だけではおもしろい地誌書をつくるのはなかなか難しいといわざるを得ない。地理学者が書く地誌書がおもしろくないのは，地理学が直接人間や社会そのものを対象にしていないという地理学の学問的性格が原因であろうと思われる。それゆえ，地理学は自然環境や空間理論などを扱うのを止めて，他の社会科学諸分野とおなじように人間や社会そのものを研究対象にすべきであるという主張がある（たとえば内藤，1990）。このような主張のもとに書かれた地域の書籍や論文はたいへんおもしろく，他分野や出版界からも注目されるものが少なくないが，つぎに取りあげる地域情報や地域研究の書籍とおなじ理由で地誌と呼ぶことを躊躇せざるをえないものもある。

現在書店には，地域ごとの解説書，各国事情とか地域入門と呼べるような一般向けの書籍がならんでいる。これらには，地域の社会や文化に関する分野別の情報がぎっしり詰まっている。その内容には編者によってかなり幅があるが，おおまかに言うと地域研究のジャンルにはいる。これらの書籍の中には，優れた内容を持ち，地理学者が読んでも興味深い記事が詰まっているものもある。とくに，現地で長い調査経験を持つ文化人類学者や社会

学者が執筆したものには，社会の実像をいきいきと描いた読者を引きつけるものが少なくない。

これらの中には，地域に関する情報を網羅的に並べたものもあり，項目だけを並べると地誌書と言えそうな本もある。しかし，地理学者が地誌書として読むと大きな不満が残り，とても地誌書とは言えない。その理由はおおきく分けて三つある。(1) 地図などの地理的・空間的情報が少ないこと，(2) 自然環境や基礎的な生業・産業がほとんど無視されていること，(3) 分野別の基礎的な情報の羅列であり，地域の枠組みや，地域の全体像などに関する解説やコメントがないことである。このことから，逆に，おもしろく有益な地域解説書や地域研究を，上記の3点に関して改善すれば，地理学者にもある程度満足できる地域解説書あるいは地誌書になるのではないだろうか。つまり手っ取り早く，一般読者や地理学以外からもおもしろいと思われる地誌をつくるためには，すぐれた地域研究を地理学者もおもしろいと思うように改造することであると考えた。以下では，ネパールを例にその具体例を示そう。

III. ネパール全国地誌

1997年にネパールの地域事情をまとめた2冊の書籍『ヒマラヤの自然誌－ヒマラヤから日本列島を遠望する－』（酒井，1997）と『暮らしがわかるアジア読本－ネパール－』（石井，1997）が刊行された。いずれも，ネパールをよく知っている多数の研究者や実務経験者が執筆したものでネパールの地域事情を理解するときに役立つすぐれた書物である（岩田，1998)。『ヒマラヤの自然誌』は自然と人間の関係にスポットを当てたことに特徴があり，ヒマラヤの自然そのものの成り立ちと神秘性を強調したこれまでの類書とは大きく異なっている。『暮らしがわかるアジア読本』の方は，社会・文化の広範な分野を網羅的に扱っている。両者とも読み物としてたいへんおもしろく，多くの地理的情報を含んでいるが，ネパール地誌として認めるのには躊躇せざるを得ない。その理由は，地域研究の一般書に対してすでに述べたように，地理的な位置情報が少ないことやネパールという地理的空間が意識されていないことによる。

ここでは，読み物としておもしろく，豊富な人文・社会的情報を含んだ『暮らしがわかるアジア読本－ネパール－』をとりあげ，地誌書に改造することを試みよう。この本は，文化人類学者が編集したもので，章立ては(1) はざまに生きるネパール，(2) 動く人々，動くもの，(3) 町の暮らし，村の暮らし，(4) 多様な生活文化，(5) 文化の今と伝統，となっており，ネパールの人びとの生活とその背景が魅力的に描かれている。

改造の第1としてネパールの地域の枠組みにそって全体の構成を変えることを考えよう。国スケールの地誌を描くときの地域の枠組みについては以前論じたことがあり（岩田，1986），それにならって枠組みを考える。これまでに書かれたネパール地誌のうち，地域的枠組みのないものや，行政区分をそのまま利用しているもの（Hagen, 1961; Thapa and Thapa, 1969; Pandy, 1987 など）をのぞくと，東西方向と南北方向の区分を組み合わせたものが目立つ（Karan, 1960; 高山，1978，Haffner, 1979; 石井，1985，1986 など）。東-西のちがいは，湿潤-乾燥という気候とビルマ系-インド系という民族文化のちがい，南-北のちがいは，低地-高地という自然環境とインド系-チベット系という民族文化のちがいを意味する。ここでも基本的には南北方向と東西方向の区分を組み合わせた地域区分をおこなった。その根拠にしたのは，すこし古い資料であるが，土地利用・人口・中心地システムの分布図（図1 ABC）である。これらをまとめると，図1Dに示したように，ネパールの地域の枠組み（地域区分）は，(1) カトマンズ盆地（首都圏），(2) ビラトナガール周辺（工業都市圏），(3) テライ（平原部），(4) 中間山地中央・東部，(5) 中間山地西部，(6) ヒマラヤ高地部となる。これに総論（全国）と周辺との関係を加えればネパール全国地誌の枠組みができる。『暮らしがわかるアジア読本』の各記事をこの地域の枠組みにしたがってならべなおした（表1）。予想されたことではあるが，ざっとみただけでも地域別の記事が大変少ないのがわかる。地域の記述は，内容的には総論の方にも幾分かは含まれているものの，テライやビラトナガール周辺についての独立した記事がまったくない。ネパールにとって重要な地域にふれられていないことは地誌としては問題である。総論のネパール全体に関する記事の中に，地域のことを意識して書かれたものと，そうでないものとがあるのは，内容によってはやむを得ないことである。

地域ごとにならべ直して内容を見直すと地誌書としての不備がよくわかる。自然地理学的な記事が全くないのは，本書の性格からいって当然であるが，地域の産業（生産活動）に関する記述も非常に少ないことに気づく。このことが，地理学者が地誌として満足できないもう一つの，より重要な理由である。

これらの不足した部分を補うにはどうすればよいだろうか。網羅的に地域や自然地理学，経済地理学の項目を付け加えればきりがないし，そうするとせっかくのこの本のおもしろさが失われてしまうだろう。追加は最小限にすべきである。地誌に関心を持ち，ネパールに長期間滞在した米地文夫は，大学の授業用のネパール地誌のカリキュラムを発表している（米地，1983）。この中には，地理学者が一般的に地誌と考える項目が，魅力的なタイトルでならんでいる。そこで，おもにこの中から，不足している項目・内容を補ってみた（表1の下線部）。

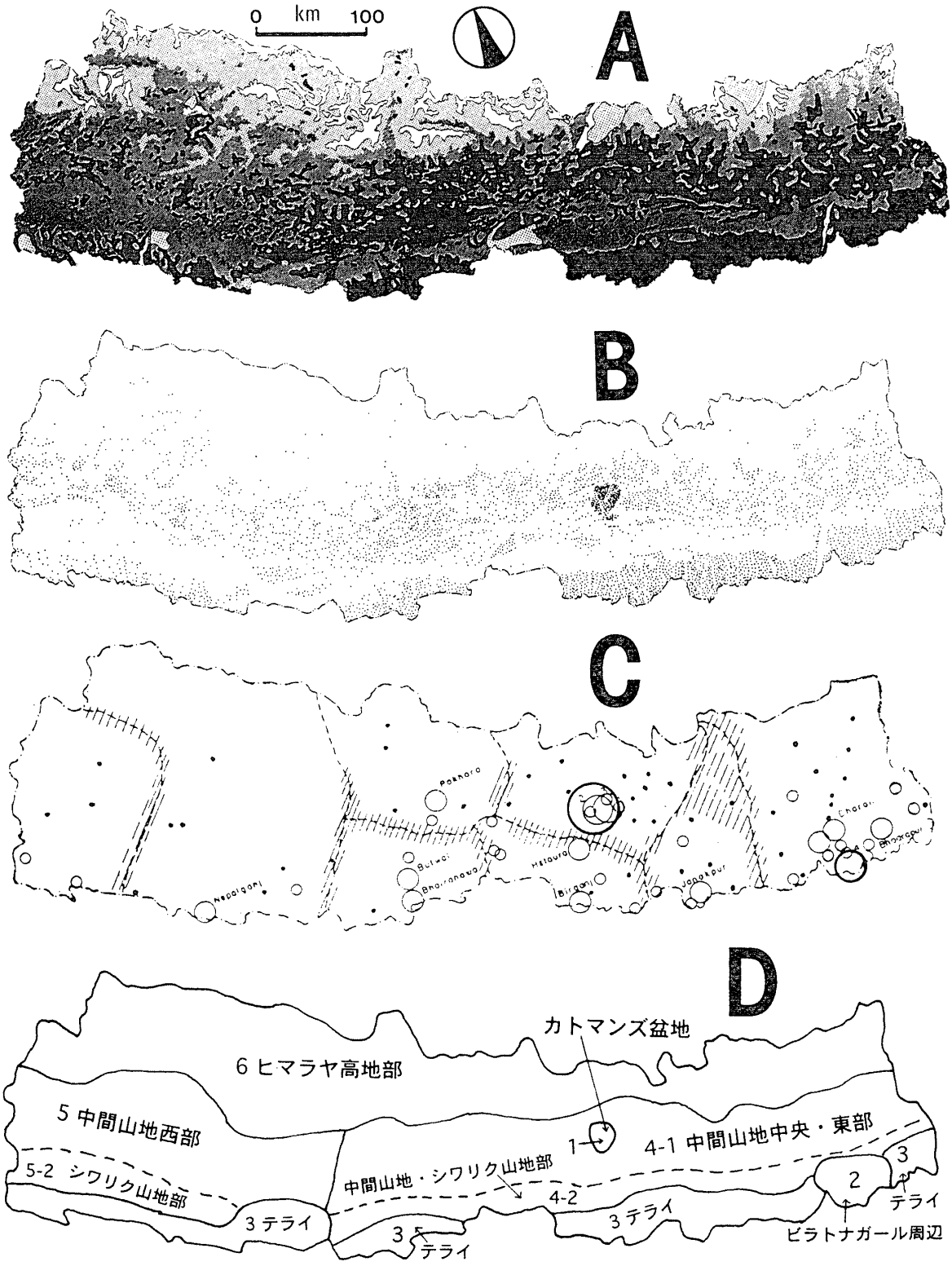

図1．ネパール全国地誌のための重要な分布図と地域の枠組み

A：土地利用（黒く塗りつぶしたのが耕地，濃い灰色の部分は森林と草地）Shrestha and Sharma (1980)，B：人口（1点が3000人）Shrestha and Sharma (1980)，C：中心地システム Shrestha (1981)，D：総合的地域区分　岩田原図.

表1　「アジア読本：ネパール」を地誌にするために

1－1．ネパール総論(1)
（対外関係：周辺地域との関係）
インドに閉じこめられた国
（ネパール・インド関係）
大国のはざまで
（ネパールとチベット・中国関係）
ＮＧＯとはなんだろうか
日本のネパール人
1－2．ネパール総論(2)（政治・経済・社会）
近くなりすぎたインド
（アイデンティティ）歴史
90年民主化とその背景（政治）
人口大国の問題と可能性
（人口問題と人口移動）
民主化後の土地改革（農業と経済）
ネパールのビジネス・ワールド（ビジネス）
市場に集う人ともの（定期市）*
ヒマラヤを越えて（伝統交易）*
ヒマラヤの国の課題（登山と大衆観光）
固定観念をこえた「ネパール」をめざして
「多言語国家」ネパールと言語運動の波
（言語）
カーストと民族の間
（民族・ジャート・国家）
性差別する民法（女性と法律）
学校へ行けない女の子たち（女性と教育）
「ビカス」をめぐって（文化と開発）
1－3．ネパール総論(3)（文化）
聖と俗の食事（食生活）*
多様性の変化（衣装・装飾）*
文化に添った居住様式（住居）*
詩の伝統と現代（文学）
「サルバナーム」と「アロハン」
：国際化に向けて（現代演劇）
豊かな舞踊の伝統（民俗芸能）*
ネパール歌謡曲の謎
ネパールことわざ考
ネパールの「日照り雨」
「いらっしゃる，おいでになる」「あなた」
2－1．地域編(1)　カトマンズ盆地
地形と伝説：盆地の地形発達
水問題とカトマンドゥ（首都の暮らし）
ゴミから見た文化（首都とゴミ）
歴史的環境の再生（文化財）
家族とカースト（家族・親族）
インドラ・ジャトラと生き神クマリ（祭礼）
カトマンドゥのチベット系の人々
人生の儀礼，年ごとの儀礼（人生儀礼と祭り）
それでもやっぱり映画が観たい（映像文化）
カトマンドゥ最新音楽事情（音楽）
ネワールの村の変貌（村の変化）
カトマンドゥ郊外
2－2．地域編(3)　ビラトナガール周辺
工業都市ビラトナガール
ダーランバザールと交易路
2－3．地域編(4)　テライ
テライへの挑戦：マラリア・農業・工業・観光開発
ネパールの総合開発計画と新都市開発軸と開発地域（スルケット）
1－2．地域編(5)　中間山地中央・東部
照葉樹林文化とレプチャ：気候と植生
東ネパールのカリンの村の人々（村の暮らし）
山あいの町ゴルカの近代的生活（地方都市）
ポカラの人間関係の変化
（町の人間関係）　ポカラ
マガルの村の暮らし
（村の仕事）中央ネパールの村
1－3．地域編(6)　中間山地西部
未開発の大自然：西北ネパールの自然，国立公園（ジュムラ周辺）
賠償交渉のかけひき
（駆け落ち）西ネパールの村
薬では治せない病気
（病気と治療）西ネパールの村
西ネパールのマスト神
（民間信仰）西ネパールの村
1－4．地域編(7)　ヒマラヤ高地部
ヒマラヤとシェルパ：高山地域の自然
「忠実な東洋人」のイメージ
（グルカとシェルパ）　グルカ・クンブ
消滅する「禁断の国ムスタンと最後の王様」
多言語を操るビャンスの人々
（極西ネパールの生活）　最西北部の村

石井（1997）の目次による．くわしくは本文参照．下線部は米地（1983）からの追加．
＊は全国を扱っているが地域的情報を含む記事

このような構成にすることで，ネパール事情のおもしろさを保ったまま，地理学者をも満足させるようなネパール全国地誌が書ける枠組みができたと思う。実際の制作にあたっては，地図を増やすことや，具体的・詳細な内容にすることを努力しなければならない。さらに，地域のまとめとして，ネパール地域の地域の構造を総合的に示した地域構造図（たとえば手塚，1996）のような図を作成して添えるべきである。

IV．ジュンベシ谷の地誌

全国地誌よりもずっと狭い地域の地誌についてはどのように考えたらよいのであろうか。ここでは，筆者がかかわった事例によって考えよう。1993年から95年までの3年間「ネパールヒマラヤにおける草地・森林利用の動態に関する民族学的調査」というタイトルの調査が東ネパール，ジュンベシ村を中心とする地域（ジュンベシ谷）でおこなわれた。研究代表者は農学出身の民族植物学者で研究の中心課題は文化人類学であったが，自然科学を含む多分野の研究者が参加した（表2）。その報告は「季刊民族学」に連載された（山本，1996-98）。目次を表3に示す。「季刊民族学」はカラー写真を中心に編集される大判の一般向けの雑誌で，ジュンベシ谷の連載記事中の，村や村人の姿をいきいきと伝える写真と記事は好評であった。この連載は地誌をつくることを意図したものではなかったが，内容が自然環境から人間まで含む多分野に及んでいること，同じような形式の地図がこの種の記事にしては多数掲載されたこと（表4）によって，かなり地誌に近いものになったといえよう。

現在（1999年10月），最終報告書として，一般向けの単行本を制作中である。現時点での目次案を表5に示す。本書をどのようなジャンルの本と見なすかは執筆者によって異なっている。文化人類学者は民族誌と考え，環境社会学者は環境誌と考え，筆者は地誌であると考えている。地誌らしくするため，ジュンベシ谷をとりまく自然環境の説明を大幅に拡充した。しかし，地理学者を納得させる地誌にするには不足している点が二つあると筆者は考えている。第1の点は，経済活動のトータルな姿が描かれていないことである。作物（栽培植物）や牧畜技術はくわしく述べられ，商業活動や観光業，出稼ぎにもふれられるが，それら相互の関係や，経済活動の全体像が書かれていないことである。第2の点は，ジュンベシ谷の地域の枠組みや地域の全体像のまとめが述べられていないことである。地域構造図，フランスにおけるコレーム地理学（手塚，1996）で使われる図のようなものを掲載することが必要である。このような図のためには，基になる機能地域区分が必要であるが，統計資料のないネパールの山村で，地域内各部分の機能的つながりや相互関係を既

表2　「ネパール・ヒマラヤにおける草地・森林利用の動態に関する民族学的調査」
チームの主要メンバー（現地参加者を含む）所属は調査当時

氏　名	所　属	専門分野	調査役割分担
山本紀夫	国立民族学博物館	文化人類学・作物学	研究代表者；栽培植物と利用
稲村哲也	愛知県立大学	文化人類学	牧畜文化
渡部和之	総合研究大学院大学	文化人類学	牧畜文化
結城史隆	八千代国際大学	文化人類学	社会組織・文化変容
古川　彰	中京大学	社会学	社会的環境利用
本江昭夫	帯広畜産大学	草地学	家畜飼養技術
藤倉雄司	帯広畜産大学大学院	草地学	家畜飼養技術
土屋和三	龍谷大学	植物生態学	植生・植物利用
本間航介	京都大学大学院	植物生態学	植生・気象観測
岩田修二	東京都立大学	自然地理学・地形学	古環境復元・測量
宮本真二	東京都立大学大学院	自然地理学	花粉分析・測量

表3　「ヒマラヤに生きる：ジュンベシ谷の森と草地と人」のタイトルと掲載順序

	タ　イ　ト　ル	内　　容
1	ヒマラヤに生きる：ジュンベシ谷の森と草地と人	イントロダクション
2	ヤク飼養者の祭りヤルジャン	牧畜の儀礼
3	谷をのぼりおりする家畜と人と水の神	ヤクの移牧の技術
	コラム　ミルクの分析	ヤクの交配技術
	コラム　等電点電気泳動法	ミルク分析の技法
4	ジュンベシ谷の二万年	自然環境変遷史
5	多彩な自然と変貌する環境	植生とその改変
	コラム　ヒマラヤの“四季”	気候
6	雑草の「栽培」	家畜飼養のための植物利用
	コラム　家畜はなにを食べているのか	食草の種類と分布
7	ヒマラヤの羊飼いグルン	グルン族のヒツジの移牧
8	ジュンベシ谷の「食卓革命」	栽培・半栽培植物と食事
	コラム　シェルパの人びとの食卓	調理と食事の特徴
	コラム　多彩なジャガイモ料理	ジャガイモの調理法
	コラム　シェルパ族の乳製品加工	チーズのできるまでとその利用
	コラム　食卓のいまとむかし	食事の変化
9	ジュンベシ谷の社会変容	聴きとりによる生活の変化
	コラム　ジュンベシの村	村の地図とその解説
	コラム　ヒラリー卿の寄宿舎	ヒラリーの援助とその問題
10	座談会：ヒマラヤに生きる	共同調査の中間総括と展望

「季刊民族学」77号から85号（1996-98）に連載された。

表4　「ヒマラヤに生きる：ジュンベシ谷の森と草地と人」に掲載された地図のリスト

タイトル（内容）	およそのスケール
ネパール全図（ジュンベシの位置）	1：13,000,000
シワリクーヒマラヤ主脈までの地形	1：1,000,000
ジュンベシ谷の地形図	1：140,000
現在と氷期の氷河の分布	1：170,000
ネパール全図（民族分布）	1：13,000,000
ヤク放牧のルート	1：170,000
グルン族のヒツジの移牧ルート	1：1,000,000
ジュンベシ村実測図	1：8,000

「季刊民族学」77-85号（1996-98）.

表5　現在執筆中の最終報告書の目次（1999年秋の案）

はじめに：ヌンブール峰の麓にて
1　ヒマラヤの自然誌：変貌する自然環境
　1－1　ヒマラヤの地形・気候・植生
　1－2　ジュンベシ谷の気象・植生
　1－3　自然環境の攪乱：ジュンベシ谷の2万年
2　ヒマラヤの民族誌：共生する民族
　2－1　多民族国家ネパール
　2－2　ジュンベシ谷の社会と人びと（ソル・クンブとジュンベシ谷）
　2－3　ジュンベシ村
3　農業と牧畜：家畜のいる農業（農牧複合）
　3－1　テンナンショウの利用（植物利用の歴史を探る）
　3－2　雑草の栽培（半栽培・飼料木）
　3－3　栽培植物と農耕（高度と農業の関係）
　3－4　多彩な家畜と交配システム（＋アイソザイム）（ヤクだけじゃない）
4　トランスヒューマンス：高度差を利用した牧畜システム
　4－1　谷を上がりおりする家畜と人びと（クランごとの谷の管理）
　4－2　グルンの移牧（ヒマラヤの羊飼い）
　4－3　ヤルジャン（ヤク飼養者の祭り）
5　変わりゆく社会
　5－1　市場の誕生
　5－2　森の利用の変化と環境破壊
　5－3　食卓革命
　5－4　都市への人の移動と人口増加
おわりに
　1　民族技術と民族知識をめぐって
　2　環境保全について
　3　学際研究の有効性

存資料から示すことは難しい。経済活動や個人個人の活動歴についての組織的なインタビュー調査と，その結果をまとめあげる手法が必要である。今回の調査にはそのような調査やとりまとめができる研究者は参加していなかった。調査が終わった現在，可能なことは，土地利用図や集落分布図，通路（山道）のネットワーク図を作成し，その解釈をすることくらいであろう。

V．実現のために必要なこと

上に述べた二つのネパール地誌の例で理解していただけたと思うが，筆者の提案はそれほど突飛な思いつきではないと考える。しかし，すでにある地域研究の既存の成果を利用するだけでは，20世紀はじめ頃の地誌が安楽椅子学派と批判されたように，現代にふさわしい評価される地誌ができるとは思えない。「他人のふんどしで相撲をとる」といわれないためにも，地理学者自身の調査をしっかりおこなう必要がある。

そのうえで，摩擦なく他分野の研究成果を利用するためには，他分野の研究者との共同研究が必要である。地理学者自身が他分野の研究者を含めてチームをつくったり，他分野の調査チームに地理学者が調査・研究分担者として参加することが必要である。

そのためには，他分野から評価される最先端の調査技術や分析方法を磨いておく必要がある。伝統的に地理学が開発・利用してきた方法や技術は意外に好評である。筆者の経験では，現地測量による地図つくりは当然としても，既存の地図を編集するだけでもずいぶん評価される。地理学者にとっては苦もないマッピッングでも，それに習熟した地域研究の学者はたいへんに少ない。自然環境各分野や，地域の経済活動の調査など地理学者が活躍できる分野は幅広い。地図作りの職人として雇われるだけなどと嫌がらずに，地域研究を地誌化するための第一歩として他分野の調査にも積極的に参加すべきである。

さらに，地誌の結論部分を構成する地域の枠組みや地域構造・空間構造を明らかにする調査技法や分析方法，概念の開発を，地域調査の成果に基づいて，もっと進めるべきである。やはり，地理学者の本分である地域の本質についての研究の発展が不可欠なのである。

VI．まとめ

繰り返しになるが，この研究ノートで言いたいことをまとめると次のようになる。

(1) 地理学の振興のためにも，社会的要請に応えるためにも，地誌は書かれなければならない。とくに，一般の読者をひきつけるようなおもしろい（興味深い）内容にしなければ

ならない。そのためには問題を絞った内容で，社会の実像をいきいきと描いたものにする必要がある。

(2) 上記のような内容を記述することは，地理学者にはかなり難しいことである。それならば，地域研究分野の研究者やジャーナリストなどのすぐれた研究成果や著作を利用すべきである。

(3) しかし，これらの成果・著作などには地誌として不可欠の地域的・空間的情報が欠けているから，これらを付け加えて地誌書としての内容・体裁を整えることが地理学者の任務である。

(4) 地誌が必要であると叫ぶことも，望ましい地誌像を論じることも必要であるが，地域研究と提携して，とりあえず，おもしろい，広く読まれる地誌をつくることが急務であると考える。

文　献

石井　溥（1985）：民族と文化の多様性：ネパールにおける空間的住み分け．週刊朝日百科　世界の地理，no.84，pp.9-102～9-105.

石井　溥（1986）：『もっと知りたいネパール』弘文堂，295p.

石井　溥編著（1997）：『暮らしがわかるアジア読本 ネパール』河出書房新社，336p.

岩田修二（1986）：地誌のための地域区分の方法：日本列島を例にして．中村和郎・岩田修二編著：『地誌学を考える』古今書院，pp.35～55.

岩田修二（1998）：書評：酒井治孝編：ヒマラヤの自然誌－ヒマラヤから日本列島を遠望する－／石井　溥編：暮らしがわかるアジア読本－ネパール－．地理学評論，vol.71A，pp.776～777.

熊谷圭知（1996）：第三世界の地域研究と地誌学－その課題と可能性－．地誌研年報，no. 5，pp. 35～45.

酒井治孝編著（1997）：『ヒマラヤの自然誌　ヒマラヤから日本列島を遠望する』東海大学出版会，292p.

坂本英夫・浜谷正人編（1985）：『最近の地理学』大明堂，257p.

杉浦芳夫（1992）：『文学のなかの地理空間－東京とその近傍－』古今書院，308p.

高山龍三（1978）：ネパール・ブータン－ヒマラヤの王国－．織田武雄編『世界地理 4 南アジア』朝倉書店，pp.374～405.

手塚　章（1996）：フランスにおけるコレーム地理学の展開とその問題点．地誌研年報，no.5，pp.21～34.

内藤正典（1990）：地理学における地域研究の方向．地理，vol.35, no.4, pp.33～42.

藤原健蔵（1997）：地誌研究とフィールドワーク．藤原健蔵編：『総観地理学講座2，地域研究法』朝倉書店，pp.1～30.

山本紀夫編（1996-98）：ヒマラヤに生きる：ジュンベシ谷の森と草地と人．季刊民族学，no.77, pp.6～26, no.78, pp.44～58，no.79, pp.44～53，no.80, pp.26～41，no.81, pp.68～81，no.82, pp.60～73，no.83, pp.60～74，no.84, pp.58～74，no.85, pp.110～117.

米地文夫（1983）：ネパール地誌の構成についての試案．日本ネパール協会編：シンポジウム・ネパール・1982年（第11回），vol.10，日本ネパール協会，pp.55～60.

Haffner, W. (1979): *Nepal Himalaya. Erdwissenschaftliche Forschung,* 12, F. Steiner, Wiesbaden, 125p.

Hagen, T. (1961) : *Nepal: The Kingdom in the Himalayas.* Oxford and IBH Publishing Co., New Delhi,

180p.
Karan, P. P. (1960) : *Nepal: A Cultural and Physical Geography,* Univ. Kentucky Press, Lexington, 100p.
Pandy, R. K. (1987) : *Altitude Geography: Effects of Altitude on the Geography of Nepal,* Himalayan Book Centre, Kathmandu, 409p.
Schaefer, F.K. (1953) : Exceptionalism in geography: a methodological examination. *Ann. Assoc. Amer. Geogr.*, vol.43, pp.226-249.
Shrestha, C. B. (1981): *Cultural Geography of Nepal,* K. K. Shrestha and K. L. Joshi, Bhaktapur, 238p.
Shrestha, R. K. and Sharma, P. (1980): *Nepal: Atlas of Economic Development.* His Majesty's Government, National Council for Science and Technology, Mapping Sub-Committee, Kathmandu, 148p.
Thapa, N. B. and Thapa, D. P. (1969): *Geography of Nepal,* Orient Longmans, New Delhi, 205p.

追記：表5の最終報告書は2000年3月下旬『ヒマラヤの環境誌』として八坂書房から刊行された。

How to Write Interesting Books on Regional Geography: The Example of Nepal

Shuji IWATA

Interesting books on regional geography are sought not only by geographers but also by the general public. Such books should focus on specific topics of contemporary interest and provide a vivid description of a region's inhabitants and their daily life. However, these books tend to be of less interest when written by geographers, since geography usually focuses not directly on people, culture, and society, but rather on geographical and spatial organization and the relationships between human activities and the natural environment. To appeal to a wider audience, geographers are recommended to learn from the outstanding results seen in the related field of area studies and/or the excellent work of some journalists. In most cases, these texts do not include sufficient information on regional and spatial organization, topics that are essential to the study of regional geography. Geographers should therefore add geographical and spatial framework information to the results of area studies. Two examples, using area studies in Nepal, indicate that the proposed improvement is appropriate and results in more interesting books. Thus, to prepare valuable and popular books in this field, geographers should master the traditional methods and most advanced techniques of geography, and then collaborate with scholars of area study.